



TITLE:

書評 木村護郎クリストフ(著) 『節英のすすめ: 脱英語依存こそ国際化・グローバル化対応のカギ!』

AUTHOR(S):

塚原, 信行

---

CITATION:

塚原, 信行. 書評 木村護郎クリストフ(著) 『節英のすすめ: 脱英語依存こそ国際化・グローバル化対応のカギ!』 . ことばと社会 2017, 19: 203-206

ISSUE DATE:

2017-10-20

URL:

<http://hdl.handle.net/2433/236174>

RIGHT:

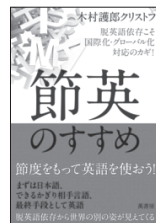
発行元の許可を得て掲載しています。

〈書評〉

木村護郎クリストフ（著）

## 節英のすすめ

——脱英語依存こそ国際化・グローバル化対応のカギ！



萬書房、2016年

四六判、288頁

〔評者〕塚原 信行

「SNS疲れ」という言葉があります。ツイッターやフェイスブック、ライン、インスタグラムなどのソーシャルネットワーキングサービスを通じたコミュニケーションにより、精神的に疲弊してしまうことを意味しています。たわいのない話を通じて「誰かとつながっている」という感覚を持つことは、コミュニケーションの楽しみだと思いますが、それも度が過ぎれば苦痛になってしまうということらしい。で、そのことについて、精神科専門医の熊代亨という人があるブログ記事で次のように述べています。

ですが、自分自身の欲求の手綱は自分で握っていたい、自分の欲求と、他人によってハックされた欲求の区別はいちおう付けておきたいという人にとっては、「自分が本当に欲しいものは何なのか」を振り返って考えることはとても大切なのではないかと、私は思っています。

（熊代亨「ネットに、書かれ、撮られ、ハックされる人々。」より）

「ハックされた」というのが少々わかりづらいですが、この文脈では「作り出された」ぐらいの意味で理解しておくともよさそうです。で、わたしも同感です。いつでも、どんな欲求についても、こうした振り返りができているとは決して言えません。しかし、少なくとも、お金をいただいている仕事については、こういう振り返りができなきゃならないと思っていますし、そう努めているつもりです。

それで、おまえの仕事はなんなの？ と問われると、一応、社会言語学あたりの研究者なのですが、日々の業務の多くは、大学での教養科目としてのスペイン

語教育の企画・実施・管理・運営であり、それでお給料いただいているという感覚が強いです。いわゆる「語学教師」ですので、外国語教育については、こうした振り返りができるようにしている「つもり」です。

その「つもり」をもって大学生に接していると、英語学習について、「自分の欲求と、他人によってハックされた欲求の区別」がついていない人が多いなあと感じます。一旦大学に合格してしまうと、「受験科目としての英語」の意義は失われてしまうわけですが、入れ替わりに「世界共通語としての英語」といった意義が降ってきて、やっぱり勉強続けないといけないな、と認識したりしなかったり……。いずれにせよ、「他人によってハックされた欲求」に振り回されつつ英語を学習しているように見える学生が少なくありません。英語に対する主体性がない、とでも言うべきでしょうか。

しかし、そういうのはよくないね、ということは、30年以上も前から言われているのです。

日本では、英語の学習は他の外国語の学習よりはるかに便利である。それにもかかわらず多くの人が英語の学習で涙を流すのは、なぜ英語を学ばねばならないのかについて自分の気持ちが整理されていず、明確な目的がないからである。

(千野栄一『外国語上達法』より)

千野栄一よりも前に同じようなことを言っている人がいるかもしれませんから、「30年以上も前」というのは「少なくとも」ということに過ぎません。とにかく、わたしは学生の頃にこの一節を読んでひどく納得した覚えがあります。

もちろん、「他人によってハックされた欲求」に振り回される学生ばかりではありません。なにせ毎年たくさんの学生が入学してきますので、いろいろな学生がおり、中には降ってくる意義を正面から受け止めて「英語は世界語だから勉強するのは当然」「将来間違いなく必要になる」と考え、「自発的に」学習に勤しむ人もいます。

しかし、本当に「自発的」なののでしょうか。キャリアプランという学生個人の選択においては、英語学習は「強制されたものではない」かもしれませんが、それを「自発的」と言えるのかどうか（そもそも、人間に「自由意志」があるのか、というのは哲学的難問です）。このような議論において、いつも思い出すのは、糟谷啓介の次のことばです。

自発的合意があれば、そこには不平等や支配関係は存在しないという考えは、あまりに素朴な（というよりも頭をつかって考えた形跡がない）見解である。  
（糟谷啓介「言語ヘゲモニー——〈自発的同意〉を組織する権力」より）

しびれます。とりわけ「頭をつかって考えた形跡がない」という一節は味わい深いです。「自分の欲求」に基づいて英語を学習しているのか、「他人によってハックされた欲求」によって英語を学習しているのか、よく考えてみよ、ということです。

もつとも、そのようなことを言われても、学生の立場では困惑するしかないのかもしれない。英語を勉強しないとなんとなくマズイ気がするけれど、勉強したたして「英語を学びたいという気持ちや必要性について、自分の頭で考えるのか？」と詰め寄られるわけですから。

さて、そんな時に役立つのが、本書『節英のすすめ』です。裏表紙（カバー）を見ると以下のように書いてあります。

【節英】自分の英語使用がどのような意味をもつかを自覚して、節度をもって使うこと

なるほど。辞書の定義としてはこれでよいですね。しかし、「自分の英語使用がどのような意味をもつかを自覚」するのは、実際には簡単ではありません。自分自身の言語的プロフィールを確認したり、日本社会の「言語編制」（言語の社会的な位置づけのあり方。安田敏朗の造語）を理解したりといった作業が必要になるからです。じゃあどうするか？

本書のよいところは、具体的な行動指針を挙げているところです。筆者はこれを「節英五か条」と名付けています。

#### 【節英五か条】

- 第一条 何をしたいかを明確に（English for my purpose）
- 第二条 共通語（国際語）よりも現地語優先で（subsidiarity）
- 第三条 恥ずかしがらずに（courage）
- 第四条 他者の力を借りつつ（autonomy）
- 第五条 多様性を尊重する（diversity）

(p.173)

五か条の実行は難しくありません。少し踏み出せばできることばかりです。筆者は、まず実践し経験しろと主張しているのです。その上で考える。実際の経験に基づいた思考は強いものです。筆者が気になっていたという3つの断絶（『国際語としての英語の評価をめぐる断絶』『英語』と『その他の異言語』と『日本語』の間の議論の断絶』『学術と現場の断絶』）(pp.281-282)に橋を架けるためにも、実践経験から思考へというアプローチは適しているように思われます。

本文中に織り込まれたさまざまなエピソードやコラムからは、「節英五か条」が、筆者の出自や経験、学識から導き出されたということがよくわかります。以下の誘いに応じて、「頭を使って考え」つつ、それらを知る楽しみを味わってみて下さい。

では、さっそく一緒に考えていきましょう。(p.5)

## ■引用出典

糟谷啓介（2000）『言語ヘゲモニー——〈自発的同意〉を組織する権力』三浦信孝／糟谷啓介（編）『言語帝国主義とは何か』藤原書店、278頁。

熊代亨「ネットに、書かされ、撮られ、ハックされる人々。」Books & Apps、2017年9月18日（<http://blog.tinct.jp/?p=43083>）。

千野栄一（1986）『外国語上達法』岩波新書、22頁。